『日刊ラヂオ新聞』

~ラジオ草創期の専門紙~

メディア研究部 宮川大介

今回の「放送史料 探訪」は、大正14 (1925) 年6月27日に創刊された日本最初のラジオ専門紙『日刊ラヂオ新聞』を紹介する。創刊は東京放送局が本放送を始めた7月12日の2週間前で、草創期のラジオ事業を伝える資料として興味深い記事が掲載されている。紙面では「日刊ラヂオ新聞社」発行となっているが、『二十世紀放送史』(NHK編)は「毎夕新聞社が創刊した」と書いており、明治期から昭和初期にかけて群雄割拠した新聞の1つ「東京毎夕新聞」が母体だったのだろう。

日本初のラジオ専門紙

『放送五十年史』(NHK編)に『日刊ラヂオ新聞』についての記載がある。「当初の発行部数は二万部(一部三銭)で、青インク刷りのタブロイド判四ページ(後八ページ)、放送番組の紹介を主体とした最初の日刊紙である」。『日刊ラヂオ新聞』の1か月の購読料は70銭、当時のラジオ聴取料は1か月1円だった。

新聞にはその日に予定されている放送プログラムの一覧といくつかの番組についての解説,あるいは放送事業に関するニュースなどが掲載されている。

創刊当初の紙面で目につくのは技術関係の 記事の多さである。当時使われていたのは, 主に「鉱石ラジオ」で, 受信にもそれなりの技 術が必要とされていた時代である。周波数が 近い東京、大阪、名古屋の混信を防ぐための 方法や感度の良い鉱石の作り方などが図解も 示しながら詳細にわたって紹介されている。



1925年10月1日付の紙面

さらに聴取者からの技術的な質問に答える「ラヂオ問答」というコーナーも毎日のように設けられ、配線図や図解を駆使した回答が掲載されている。何としてもラジオを聞いてやろうという当時の人々の熱意がひしひしと伝わってくる。ラジオという新しい技術に対応するための情報が網羅的に満載されていた新聞だったのである。

ラジオ関連の情報を伝えるだけでなく、『日刊ラヂオ新聞』はラジオドラマの脚本の募集も行っている。1925年12月19日の夜には1回目の懸賞で1等となった「隅田川」が東京放送局から放送された。同日付の紙面には「隅田川」の台本全文と解説が掲載されている。隅田川で水上生活を送る家族のある日の出来事をドラマにしたもので、全編が川に浮かぶ小舟の

中でのやり取りで構成されている。

解説によると、「放送局のラヂオドラマ研究会員諸氏の審査会で満場一致で傑作と推薦されたものだけに、発表されない前から非常な期待を以て渇望されてゐた脚本」なのだそうで、「耳の芝居として音と声とが如何にも巧に使はれてゐる。対話の呼吸にも寸分の隙もたるみもない、実に気の利いた脚本である。(中略)水上生活者の夫婦関係と親子の恩愛を如実に描いた、熱と力の充実した作である」とベタ褒めである。



ラジオドラマ「隅田川」の記事

女房役を演じた女性(女優と思われる)についての記事もあり、彼女は病床にあったのだが、ドラマのあらすじを聞くと「深い感銘を催して急に起き直り、『病を推しても役をやらせて貰ひませう』と病も忘れたやうであつた。ここらが嬉しい芸術家気質と云ふものであらう」とこちらもドラマじみている。

『日刊ラヂオ新聞』は、情報伝達だけでなく、新しいメディアであるラジオ事業を盛りたてる役割も演じていたのである。ちなみに懸賞の1等賞金は300円、聴取料や新聞購読料から類推すると現在の価値では50万円から100万円ほどであろうと思われる。

投稿欄 「チクデンチ」

『日刊ラヂオ新聞』のあらましは以上の通りだが、草創期の紙面に興味を引くコーナーがある。不定期ではあるが、「チクデンチ」と名付けられた読者投稿欄が第1面に掲載されていた。いくつかを拾ってみよう。

大正14年9月21日付の「東京放送局への善言」はペンネーム「楽四方生」氏からの投稿で、ラジオの受信状況について、「昼間は免も角夜間に至つては不明瞭で何を言つてるかわからない時がある。仮放送なら我慢もするが本放送とあつては不遜である。近来幾分よくなつたらしいがまだまだである」と善言ならぬ苦言を呈している。

『放送五十年史』によると、仮放送の開始前、東京放送局が使用を予定していた米国製の500ワット送信機が、あろうことか大阪放送局に買い取られたため、東京放送局では220ワットでの仮放送を余儀なくされ、本放送にはようやく1キロワットの送信機が間にあったと書かれている。前述したとおり、受信側も「鉱石ラジオ」という、少々技術を必要とする受信機を使っており、受信者は放送局側の技術的努力を要求したのである。

10月5日付の「北斗星」氏の投稿は、アナウンサーが日蓮上人を「ニチレンジョウニン」と読むなど「ノンセンスなる誤読」が多いと指摘している。「其放送記事を入手せば直に其下読を行い地名人名其他に就ては、予め之を質したる上にマイクロホンの前に立つべく『何とかなるだらう』と云ふが如き無責任なる切売根性にて真面目なる聴者に向ふ事は厳禁すべきものなり」となかなか手厳しい。

10月16日付、「田中博」氏の投稿は、「東京のアナウンサーよりも大阪名古屋のソレの方

が遙に民衆的で一般に親しみ易いとはラヂオフアン諸子から時々耳にする言葉であるが昨今東京のアナ君の言葉は私共が聞いても家庭的でなく、民衆否聴衆から遠く離れたお役人臭い様に伺はれる」と痛烈である。

投稿は番組編成内容の批判にまで及んでいる。9月27日付の「ケイワイ生」氏は、「二十日の日曜日の東西プログラムを比較すると東京が偶々殆ど洋楽許りであるのに大阪は文字通り全部日本物と云ふ極端なコントラストに驚く。徒に日本音楽に反対を唱へるのではない。反対に洋楽オンリーの場合に於ても同断である。種々の階級に萱つて色々の趣味を持つた人達が一日ラヂオをエンジョイする日曜日に於てかいる偏頗的放送は断じて不可と信ずる」と批判している。

一方で、東京放送局を応援する声もある。 10月30日付、「裸児夫」氏(ラジオと読ませる のであろう)は、「やれ官僚的だのやれお役人 風だのと勝手な熱を吹いて好い気に為つてゐ らつしやるが、親愛なるJ、O、A、Kの諸君! かまへてお気にされるな」と援護する。

商業都市大阪のラジオ放送

「裸児夫」氏は、大阪と比較すると東京はまだ編成に幅があるとして「東京なればこそ、小さんでも、松尾でも、加賀太夫でも、歌右衛門でも、ベートヴエンのシムホニーでも何の苦も無く聴けるではないか。BKやCKの様に、次は〇〇屋呉服店営業部長〇〇氏の御講話だの次は〇〇音楽隊など、怪し気な広告楽隊などを聴かされて、民衆的が聞いてあきれる。無常音を禁止を強いている。

やり玉に挙げられた大阪放送局の放送内容

は、10月3日付の「大阪 山内生」氏の投稿でおぼろげながらも理解できる。大阪放送局では時々、地元新聞や地方有力者からの「寄贈」という形で『岡山デー』とか『徳島デー』とかと称して放送しているが、「新聞社の広告、地方物の宣伝には好都合かも知れぬが迷惑なのは加入者である。朝から晩まで長唄や常磐津ばかりでは子供達は少しも楽しむ機会が得られない。大人でさへあきあきする。貴局は寄贈を其ば正直に放送しなければならないのか。取捨て選択の権能がないのか。之では寄贈者には忠実かも知れぬが加入者に対しては誠に無責任も甚だしい」と苦言を呈している。聴取料を取っておきながら商業的な放送を行うことに対する疑問を投げかけている。



『日刊ラヂオ新聞』の「チクデンチ| 欄

これに反対する意見も掲載されている。10月10日付で「大阪 並木生」氏は「JOBKは我等四万の加入者の放送局である。或一部のファンの独占すべきものではないことは云ふまでもない」としながらも、「われわれは変化を好む。異動は生長を意味する。JOBKは今後もどしどし特色ある地方デーを催して、ややもすれば沈滞せんとする放送プログラムに一脈の清新味を加へて下さい」と述べている。

「並木生」氏は、商業的動機が放送内容を 活性化すると主張するのである。

この「寄贈放送」がどのような仕組みの放送

であったのか, 放送経費を寄贈者が負担した のか, 商業放送と言えるのかどうかは資料不 足でよく分からない。

『20世紀放送史』によると、ラジオ放送開始前、大阪では放送局の設置許可を出願した24団体の間で統合を巡って紛糾が続いた。当時の逓信大臣、犬養毅が「紛糾が続くのは、放送がもうかる事業だと見ているからであろう、これをもうからぬようにすればよい」と放送事業体の性格を営利法人から公益法人に改めたとある。しかし、商業都市大阪に暮らす人々の多くは、ラジオは商売の道具であり、商業放送の形で行うのは当然だと思っていたのであろう。

一方で、聴取料制度自体も批判の対象として「チクデンチ」に登場している。11月4日付の「カネーボー」氏の「おいらは不完全盗聴者だぞ」という投稿がある。それによると「カネーボー」氏は加入申し込みをして、加入者標章という「名誉ある勲章」も貰ったが、月1円の聴取料を払っていないから「不完全盗聴者」だと言うのである。払わない理由として、仕事が忙しくて日曜の夜しかラジオを聴けず、合計しても1か月10時間ほどである。100時間も聴いている人と同じ聴取料では払う気がしない、と江戸弁でまくし立てている。

本放送の開始から半年, すでに聴取料の不 公平感をめぐる議論が始まっていた。

「チクデンチ」は、内容が相当詳しいことからラジオ局関係者によって書かれたか、あるいは『日刊ラヂオ新聞』編集者の自作自演という可能性もある。それにしても開始間もないラジオ事業に対し実に自由闊達に意見を述べている。投稿者たちはラジオ事業にある種の「お役人臭さ」を感じながらも、ラジオは自分たち

のものだという意識を持っていたのだろう。インターネットがない時代に意見を広く述べることができた投稿欄は、現代のソーシャル・ネットワークに似た役割を果たしていたと言えるかもしれない。投稿欄でのやり取りを読んでわれわれは、ラジオという新しいマスメディアの出現を体験した当時の社会の雰囲気を垣間見ることができる。

『日刊ラヂオ新聞』のその後

『日刊ラヂオ新聞』創刊から半年後の11月15日, 読売新聞が付録として2ページの「よみうりラヂオ版」を始めた。読売新聞の正力松太郎社長は販路拡大の手段としてラジオ情報の掲載を始めたのである。これを追って都新聞や東京日日新聞、東京朝日新聞なども次々とラジオ版の掲載を始めた(『20世紀放送史』)。

しかし、昭和6 (1931) 年9月の満州事変前 後から各紙のラジオ版は縮小の一途をたどり、 「よみうりラヂオ版」はこの年の7月には1ペー ジとなり、太平洋戦争が始まった1941年ごろ には番組表だけとなってしまった。

『日刊ラヂオ新聞』のその後について詳細は不明だが、『ラヂオ年鑑』(NHK編)をたどると、昭和8年版の「ラヂオ関係新聞」の欄には『日刊ラヂオ新聞』の記載があるものの、昭和9年版では記載がない。理由は明らかではないが、昭和8年から9年にかけて『日刊ラヂオ新聞』は廃刊したと思われる。

戦時色が濃くなるとともに自由奔放な意見が掲載されていた「チクデンチ」も姿を消し、ラジオ自体も民衆の手から離れていったのである。

(みやがわ だいすけ)

※ 引用部分は、原文の総ルビのうち難読部分だけを入 れた。